

世界紀行文学全集

4

イギリス・スペイン・
ポルトガル

世界紀行文学全集

4

イギリス・スペイン・ポルトガル

心賀直哉 ● 佐藤春夫 ● 川端康成 ● 小林秀雄 ● 井上靖

ほるふ出版

世界紀行文学全集 第四卷

イギリス・スペイン・ポルトガル

監修

志賀直哉・佐藤春夫・川端康成・小林秀雄・井上靖

発行日

昭和五四年九月一日 発行

発行所

株式会社ほるぷ出版

東京都新宿区新宿二十九・十三 電話(〇三)三五四七〇三一(代)

代表 中森蒔人

総発売元

株式会社ほるぷ

東京都新宿区新宿二十九・十三 電話(〇三)三五六六二二一(代)

製作

東京連合印刷株式会社

目 次

イギリス
石川 欣一
野上 弥生子
高柳 賢三
大内 兵衛
阿部 知二
山川 菊栄
志賀 直哉
笠 信 太郎
島 田 巽
小泉 信三
獅子 文六
吉田 健一
加藤 周一
嘉治 隆一
大河内 一男

リーチ訪問記……………	九
ロンドンの宿……………	二一
ムヘ……………	二六
オックスフォードとケイムブリッジ……………	三三
イズの日……………	三六
古物市……………	五
白塔……………	五
旧き都の一日……………	五
秋冷……………	五
ブランデン氏とウェイリ氏……………	六
震教徒の村など……………	七
富農の家……………	七
協同組合の農場……………	七
ロンドンにて……………	八
イギリスだより……………	八
テニソンの家に泊る……………	九
「地の涯」紀行……………	九
イギリス……………	九
戴冠式の前景気……………	二〇
戴冠式を見て……………	二六
戴冠式に参列の記……………	二九
女王と皇太子……………	二九
英国の旅……………	二九
炉辺のイギリス人……………	三〇
キャンタベリイ行……………	三〇
マルクス墓……………	三〇
アダム・スミス巡礼(上)……………	三二
アダム・スミス巡礼(下)……………	三二

飯塚 浩二
 野上 豊一郎
 野上 弥生子
 竹山 道雄
 志賀 直哉
 堂本 印象
 式場隆三郎
 門田 勲
 宮本 三郎
 火野 葦平
 村松 梢風
 村川 堅太郎
 ポルトガル
 木下 杢太郎
 市河 晴子
 志賀 直哉
 大宅 壮一

発掘物の様なコルドワ展望……………	二六二
牛心理学……………	二六三
アルタミラの洞窟……………	二六四
闘牛……………	二七一
スペイン日記……………	二七六
スペインの贗金……………	二〇六
マドリッドにて……………	二四四
マドリッド……………三七	
マドリッドの夜……………三四	
マハ……………	二五五
闘牛を見た話……………	二六六
トレド……………	二九六
スペイン印象記……………	三三三
スペイン……………三四	
俠盗・闘牛……………	三三六
マドリッドの大使館、セゴビア行き……………	三四〇
コインブラ……………	三四四
リスボン行……………	三四五
リスボンにて……………	三四八
ブラジルの故里・ポルトガル……………	三四九
マドリッドの米国化……………	二六三
闘……………	二六四
マハ……………	二五五
闘牛を見た話……………	二六六
トレド……………	二九六
スペイン印象記……………	三三三
スペイン……………三四	
俠盗・闘牛……………	三三六
マドリッドの大使館、セゴビア行き……………	三四〇
コインブラ……………	三四四
リスボン行……………	三四五
リスボンにて……………	三四八
ブラジルの故里・ポルトガル……………	三四九

執筆者・出典一覧……………三七

地 図 …… イベリア半島、マドリード、バルセローナ、リスボン…………… 巻末（折込）

地圖製作 玉木 進一

イギリス・スペイン
ポルトガル
編

リーチ訪問記

石川 欣一

*

一月十二日、雨の中をタキシでバディントン駅まで行く。暖かい雨で、ハイド・パークの裸木が、今にも芽を出しそうだ。十時ロンドンをはなれて一時間もすると雨がやんで、太陽が照っている。ガラス越しに目にまぶしい。モスクワの雪、パリの狭霧、ロンドンの濃霧、それぞれ美しさを持つてはいるが、やはり太陽はなつかしい。

英国の田舎は美しい。ことに雨上りの丘は青青としている。

*

トーマス・ハーディの国ドーセツトシャ、列車の右側に大きな虹が出た。よく見ると二重の虹だ。畑に雉が遊んでいる。手入の行き届いた庭園には、何百頭かの鹿がむれていた。いつの間にかブリマスに来ていた。デヴォンを通過したのである。コーンウォール。風景がまるで一变する。風のあたる丘は如何にも荒蕪だが、谷は深くそして樹木が鬱蒼としている。急な斜面

に白い家が立ち、溪流が飛沫を上げて海に転げ込む。あざやかな、黄色い花をつけた灌木。あゝGORSEだ。コーンウォールで一年中咲いている花だ。はりにしだした。

*

汽車は突然海岸に出る。崖の下が相当広い弓形の砂浜だ。カービス・ベイ。バーナード・リーチはここに住んでいる。そのつぎの入江がセント・アイヴス。暗く、風が相当に強く、おまけに雨が降り出した。何という日にセント・アイヴスに来たものだろう。

*

プラットフォームにリーチが立っていた。こちらには列車を下りた唯一の日本人だから、リーチにはすぐわかったろうが、私のほうでも、何人かいた人の中からリーチを見つけ出すことは、極めて容易だった。何かしらリーチには、かががリーチであることをわからせるものがある。私の見るところ、それは正直さである。私はリーチと呼びすてにして来た。礼を欠くこと甚だしい。さりながらかれのことを書き、かれのことを思う時には、ただのリーチが一番私の感情に近い。

*

私はリーチの自動車に乗った。急な坂を上り、下り、左手の坂を上ると、これがランズ・エンドへの路である。はじめてここに来た時にはたった一軒だったが、今では町と自分のポッターとの間がすっかり家であらってしまっ——と彼はいう。青々としたキャベツ畑に面し

て、コーンウォール風に石でできずき、それに白い土を塗った建物。軒の下に薪が積んであるの、これがリーチ・ポッターだなどと思う。門を入ってつきあたりの納屋に自動車を仕舞う。左手は陶土を洗う場所。流の水を引いて水車をつくり、これが土を粉砕する。納屋の右にもう一つ納屋。ここには出来上った品がおいてある。この三つに面して、窯場と小さな陳列室と母家とが一行にならび、それらは道路に沿っているのである。

*

われわれは母家に走り込んだ。タイルを張った炉に薪が燃え、その前にはお茶の用意が出来ていた。ワイヤヘアド・フォックステリアが、しきりに人なつこく、まつわりつく。広い部屋のマントルピースに、窓に、棚に、机に壁にいろいろな陶器がある。柳をかいた古い瀬戸、富本氏の壺、浜田氏の皿、スリッパウエア——勿論リーチのものが一番多いことはいうまでもない。立ったもの坐ったり、落つかずに私にはあつた。皿、この壺と目を動かした。いい、とてもいい気持だ。私には名画を集めた展覧会より、このほうが遙にびびりた。これは土で出来ている。艶を持っている。丸味がだる。指で触れることができる。あたたかいのだ。私の掌のあたたか味にかれ等はレスポンドする。どれもこれもいいものばかりだ。しかも、古いものはいざ知らず、新しいもの、すくなくとも私の知る限り富本氏とリーチの作品には、その背後に動く意識が滲み出している。芸術と工業と

の二つの大きな潮流が、かれらの心の中でぶつかって、三角波を立てている。「工芸」——一言に工業と言ってしまうば、至って簡単だが：

＊

コックスという娘さんと、フォレストアという青年とが加わって、四人でお茶をのんだ。娘さんは秘書をしている。もう一人若い人がいて、現在ポッターリーのスタッフは三人だが、リーチの長男のことを忘れてはならぬ。日本で生れて今年二十二、もう一人前の陶工だ。お父さんの留守を預かってやって行くのだ。それにダンという、背の低い、とてもニコニコした爺さんを加えて、スタッフは五人になる。ダン老はポッターリーの開設以来ここにいて、土をこねたり、掃除をしたり、いろんなことをやっている。

＊

土曜日、午後、天気がよくさうだから、ドライブしようというのである。下の女の子が二人来た。子供は五人、上の二人は男の子で東京で生れ、つぎの女の子は北平、下の二人は英国生れた。セント・アイヴスを出るとすぐに雨。リーチは土砂降りの雨の中でしきりに腹を立てていた。日本のほうが芸術に対する一般のスタンダードが高いこと、柳宗悦氏みたいな人が来て英国で「工芸」のような雑誌を出すといふこと。そんなことを話しながらカービス・ペイの私宅までドライブした。ここでもお茶が待っていた。飾り気のない、しとやかな、日本風の感じのするリーチ夫人は、東京のことをいろいろ

とたずねるのであった。「青山から東のほうに電車で行くとお濠に出る、あすこが赤坂見付。そこから坂を上ってまた下りると、ああ、あすこは三宅坂といった。右に曲ると日比谷。渋谷は道が悪くて困ったが、今はどうなったか知ら？　こういう名前が、何と多くの思い出を、自分の心に持つて来ることだろう！」

＊

日曜の朝汽車がセント・アイヴスを離れるまで、私宅で、工場で、ホテルで、自動車の中で、リーチと私は笑によくおしゃべりをした。陶器のことばかりでなく、満州国の現状、日本における自由主義、子供の教育、その他ありとあらゆる問題について話し合った。だがいつも、いつの間にか、話は工芸のことになっていた。

＊

リーチとの話を要約することは困難である。しかし大体においてつぎのようなことは、リーチの日本訪問に関して、われわれの読者にも、またリーチ自身にも、役立つ予備知識ではあるまいかと思う。リーチはセント・アイヴスで陶器をつくると同時にダーチントン(Darlington)というところの学校で教えている。この学校のことはいづれ改めて書かねばならぬが、エルムハースト氏夫妻という金満家がやっている一種の社会事業で、英国の知識階級から大いに興味を持って見られ、エッパスタイン、ハックスレー、ウエルスなど、いづれも子供をこの学校にやっている。リーチは柳宗悦氏から日本

へ来ないかとの招待を受けた時、エルムハースト夫妻に相談したところが「日本は近ごろ西欧の国々から自分自身を隔離している。その日本から来い、来てくれといわれる人は、何をさしおいても行くべきである」との意見で、旅費、滞在費の大部分を出してくれることになった。

＊

同伴者はやはりダーチントン関係のマーク・トビー(Mark Tobey)という米国人、リーチにいわせると「画家で図案家で室内装飾家で古典や現代の舞踊に深い興味を持つ後期印象派、自分とは性格も趣味もまるで違うだけに、東洋への旅はお互に利益が多いと思う」とのこと。二人は三月はじめロンドンを立ち、欧州の美術をもう一度見て、ネーブルスから照国丸に乗ろうというのである。

＊

照国丸の神戸着は四月十六日。それから半年間日本にいた。日本での計画は一カ月ずつを富本、浜田、河井三氏と暮し、陶器をつくりお喋り舌をする。「富本とはうんと議論をすることがある。Hard Fightになるだろう」とリーチは笑っていた。これで三カ月。あと一月は田舎を旅行して、窯を訪れ工芸家達に会う。その後一カ月、京都に家を一軒かり、友人と話し合い、日本での印象と感銘を消化する。これで五カ月、「残る一カ月は十数年来心の中でひそかに計画していることだが、漁船を一艘借り、柳や富本や浜田と瀬戸内海をブラブラしながら、ただ怠けて送る」

＊

日本で六カ月、朝鮮で一カ月、支那と米国各一カ月、旅行期間を入れて約一年の旅になるだろうというのがリーチの予定である。

＊

リーチがセント・アイヴスで日本風の窯を使用していることは、多少陶器に興味と興味を持つ人なら誰でも知っている。英国の窯と日本の窯——これは同時に工業と芸術との二つの異なる領域を代表している。芸術品は高価になる。

普通の人には手が出せぬ。如何にしたら比較的安く、相応にいい物をつくり、一般人にいい物が行き渡るようにすることが出来るか？ 陶工はただ少数の美しい物をつくり、少数の人に高価でそれを売っていいばいいのか？ 社会意識は全く無視すべきだろうか？ それらの問題はリーチ自身をして語らしめたい。私はただセント・アイヴスと、リーチの生活と、今度の旅行の大体とを紹介するにとどめておく。

(昭和九年)

ロンドンの宿

野上 弥生子

昨年（昭和十三年）の十二月二十六日、私を見送りながら冬休の数日をイギリスで一緒に過そうとする長男Sをつれて、初めてロンドンに着いた日の日記に、つぎのように書いてある。

『十時を過ぎたヴィクトリア停車場には、Tが朝日のKさんとクルマをもって迎いに来てくれていた。北イタリアに入ったころはじまった大風雪でひどく遅れ、パリで出迎えてくれた人たちも、停車場で何時間も震えていたらしいが、ここでも午後から幾度も無駄足をしたと云う。パリから打った電報もどいていなかった。冷たい霧雨の中にネオンの赤い色がなにか印刷したような美しさである。大都会らしい重厚しい迫力。路は雪溶けでどろどろしている。その中を女たちが長靴で歩いているのが、ローマから来た眼にはもの珍らしかった。あすこでは、十二月でもシクラメンの紅い花が街路に活き活きと咲いていたのだから。』

Tが十日ほど前にホテルから引越していた

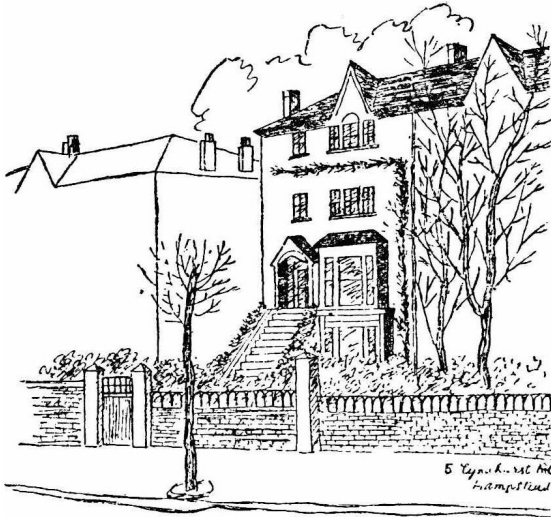
ハムステッドの家は、プロフェッサ・モレーイと云うロンドン大学の名教授の邸宅であるが、今は田舎に隠退したので友達のみシズ・ハントが預って、一、二人下宿人をおいているのだと云う。私たちの三十畳ぐらいの大きな部屋で、書斎であつたらしく一方が高い天井まで書棚になり、書物がぎっしり詰まっている。広い窓が一つ、これは前庭に面して古風な畳み戸がつき、書棚と反対の壁のストーヴも昔ながらの暖炉で、大きな石炭が赤赤と燃えていた。マンテルピースの上の青い壺。横の壁には、まだ電鈴などのなかった時代に、呼鈴に使った円いお皿形の金物がくっついているという有様で、ディッケンズの小説にそっくりの感じである。ミシズ・ハントは六十近くの未亡人で、半白の髪を短く切っていて、きまじめな、質素な姿態をした、鼻の高い、淡青色の眼の窪んだ、大柄な女。手伝い女のミシズ・ライレイは女主人よりも五つ六つは若いらしい、小作りなゴム人形のような顔をした女。二人ともまたディッケンズの中に出て来そうな人物である。この他にはジップと呼ぶ大きな黒猫が一匹。英国で生活する以上、なまなかハイカラなホテルよりこの古色蒼然たる家の方がおもしろい。——』

明けの春の四月末日、大陸に旅立つまで私たちはずっとこの家に住んで、どこにも移ろうとはしなかった。土地柄から云っても、ロンドンが今ほどたてこまない頃には、下町のまん中に

あるセント・ポール寺院の円屋根が、遠く望ま
れたと伝えられる高台の古い屋敷町なので、終
日しんとした静かさであった。それに壁の影
しい書物が、はじめから私の旅心地を奪った。
暖炉の前に椅子を引きよせて好きなものでも読
んでいると、文字通りアット・ホームな感
じで、見物などはどうでもよいと云う氣に
さえるのであった。

暖炉は、部屋の掃除とともにミズ・ラ
イレイの受け持ちである。毎朝私たちが食
堂に行っている間に、彼女は上手に火をお
こす。新聞紙を細のように捻じて、輪投げ
の輪のように円くしたものが焚きつけにな
るが、この製作は女主人のミズ・ハントの
夜業らしい。とにかく英国人の生活におい
て、この古風な暖炉のもつ意義は重大であ
り、朝の挨拶にしても、暖炉の火とお天気
のことを欠いてはならなかった。で、私た
ちは食堂から帰って来ると、まだその辺を
拭いているミズ・ライレイに対して云う。
まあ、よく起きたわね、とか、おお、なんて
いい火なんでしょう、とか。——しかし白
状すると、英語を眼とあたまでのみ学んだ
私は、こんな平凡な挨拶ほど一層軽く出な
かった。そうして lovely weather や lovely
morning とともに、火も lovely で片付けてし
まえばことは済むのを呑みこむまでは、これ
はよく発火してごさいます。の、今朝の火はま
ことに見事ならずやだの、まるで芝居の科白か
作文の調子になりかねないのを、ミズ・ラ

レイは笑いもせず、もし消えかけたらこうする
のだ、と二枚の琵琶の形をした板を革ではぎ合
せた、恐ろしく時代な火起しを取りあげて、使
い方から教えてくれたものであった。



たらに lovely を使用するのも、私をはじめま
ごつかした。暖炉の火どころではない、料理が
味のよいのも、お茶が旨いのも、お菓子がおい
しいのも悉く lovely であった。女たちだから
こんな云い方をするのかも知れないと思ってい
たら、白髪のお爺さんまで lovely を濫発する

ので変な気がした。勿論語意的に云えば変に思
うのこそ間違いであるのはわかっているが、そ
の表現を、なんとなしに女性的なものにきめて
いた私の感じ方は、同じ英語にしても、一種日
本的な感受法ができている証拠ではあるまい
か。——しかし無駄話はやめて、いわゆる

lovely に燃えている火の方へ近づこう。

外出しない時には、私は暖炉の前の卓で
字引を引きながら、『タイムズ』を読む。
これがロンドンへ着いて一番にはじめた勉
強であった。この頃は『タイムズ』も中
宣伝的だ、と日本人仲間が噂したが、それ
でもローマで官報のような新聞を、イタリ
ア語のできない私が、名詞だけで察し読み
をした不自由さに比べれば、溪谷の細道か
ら峠に飛びあがったようなひろびろした視
野が開け、世界の各国がそれぞれの立場や
繋がりをもって、なにか連山のように一望
の下に集まる感じであった。日本と云う字
を見つけるとまっ先に読んだ。

屋敷は日曜以外には宿では食べない約束
になっていた。しかし一人そうやって閉じ
こもっている時などは、食事に出かけるの
がおっくうになり、半パインの牛乳と、
二つの半熟卵で済ました。おいしい牛乳であ
った。卵には地卵と輸入ものがあり、一つ一つに
オランダとか、デンマークとか、紫いろの判こ
が押してあった。その二つの国がロンドンのお
台所であるのはわかっていながら、それを見て
今更になるほどと思うのであったが、そのうち

ロンドンの宿

に、暖炉の火と小さいアルミの牛乳わかしを利用して、とうと御飯まで炊いた。お米は近くのKさんの家で使っているスバニッシュ・ジャパンというのを、紙袋に少し貰ったのである。日本人向きとされているだけ、粒は稍々細長いが粘りもあり、東京と違わない御飯ができあがる。ウイスキの空瓶に入れていっしょに届けてくれたお醬油は私の料理を一層複雑にした。私は大きな牛肉の片をそれにつけ、虎屋のようなブリキの蓋を暖炉の火に載せてじゅうじゅう焼いた。洋風ジנגスカン料理である。部屋が臭くなりはいかないかと心配したが、通風のよい煙突のおかげで臭気はみじんも残らなかった。

しかし、こんなことはほんの時たまである。朝食を豊富に詰めこむイギリスでは、昼食は軽いだけが午後の大事なお茶を愉しめるのであったから。全く英国でお茶に大騒ぎする有様は噂に聞いていた以上で、四時頃から五時までのティー・タイムは、彼らには一種神聖なサーヴィスであり、地上の法悦であるらしい。路ばたの新開地でも、乞食でも、それだけは欠かさないと云われているくらいで、家にあれば家で、出なければどこか店にとびこんで、紅茶茶碗を手にしないものではなく、日本のように飲食をしない劇場でさえ、(マティネに限るが)お茶だけは争って飲むのが私をはじめびっくりさせた。それも喫茶室があるわけではなく、プログラムやチャコレイトを売りに来る中売の女たちが、その時刻になると注文を取って廻る。そうして

急須と茶碗とミルク入れとお砂糖と、それにお茶とともになくてはならないバターつきの薄切パンと、カステラなどを載せた四角な銀盆を配って来るのである。見物のジュントルマンとレディが、狭い座席でその盆を膝の上に載せ、幕間に飲んで見るのを見るとなんと古風だろうと思いい、またそれ程にしても一度のお茶が省けないのかとおかしくなったが、いっぺん真似をして取って見て、それがなかなか修練を要することを知った。

だいたい、人の座席越しにこぼさないように盆を受けとるのがむずかしく、また膝に載せるのに一と苦勞である。ただ彼らは脚が長いから膝の安定もわりに確からしいが、私のようなチビの膝は、一方だけ低くなった卓のようで、載った盆を支えるためには、絶えず両方の靴を浮かしてなければならぬ。ちょっと隣りから触られてもがちゃんである。その中で注いで、お砂糖を入れ、お乳を入れ、やっと飲んで、お菓子を食べて、それを短い幕間に丁度にすまして、盆を返すのだから気ぜわしさこの上なしであるのに、彼らは上手にやっけてける。のろ臭いのが定評のジョン・ブルも、お茶となると特別な能力を発揮するのもかも知れない。

御飯まで炊かした暖炉の火は、もちろん私にお茶を拵えさせた。一つのかんと三つの茶碗は、一人ぐらゐお客様があつても困らなかつた。そのうちに日本でもてはやすりブトンの紅茶はむしろ植民地行のもので、通人はクーパードと云う老舗のものを悦ぶのだと聞いて、外出の

ついでにTに買って来て貰ったりした。それとこれとどれ程に違うか、細かい味や匂いの区別までは容易にわからなかつたが、見ただけでも目の覚めるような紅いろは、牛乳で乱すのが勿体ない気がするのであつた。その頃にはもう薄暗くなっているのにわざと電燈をつけず、それで暖炉が一層美しく、赤く紫っぽく灰っぽく輝くのを眺めながら、いつまでもお茶を飲んでるのが好きになつた。

見物に出ない日でも、Tは一週に三度は極まつた外出があつた。しかし私は家に残って独りそうしているのを見ると、ミシズ・ハントはなぜ運動に出ないかと云つた。東京では何十年のあいだ、単に運動のために出歩いたことは殆んどないと云うと、彼女は驚いた顔をした。

晩餐は昔ながらの銅鑼で告げ知らされる。この銅鑼は洗面器を二つ合せたほどの大きなもので、私たちの部屋もすぐ前の廊下に、ちょっと衣桁を低くしたような柵に、撥といっしょに懸かつている。毎晩七時半の食事時間になると、ミシズ・ハントはぐわん・ぐわん・ぐわんとまことに威勢よく、それこそ山鹿流の太鼓もどきに打ち鳴らすのである。この合図で私たちは地下室の食堂へ下りて行く。朝は私たちだけ遅く食べるので減多に顔を合せないパーミンガム生れの美しい娘さんも、銀行へでも勤めるらしい若い男のひとも、夜は一緒である。手伝いのミシズ・ライレイも、屋の仕事着を黒い服と白い襟に更えて、女主人と並んで食卓につく。スーヅ、肉、馬鈴薯に青豆が青い葉っぱの付け合

せ。お菓子か、でなければ果物の砂糖煮か、酸っぱいルーバーブのクリームかけ。肉が鶏になったり、肴に代ったりはしても、このコースには殆んど変化がなく、その上馬鈴薯は揚げるか、焼くか、粉ふきかで必ず現れた。白状すると、ローマの一と月のホテル暮らしで、スパゲッティとともに潤沢なチイズを、デザートには匂いのよいイタリア蜜柑をふんだんに味い、ペルモットやキャンティのおいしきにも馴れた舌には、この極まりきった食べものを、冬のさなかに水だけで流しこむのは少し情けなかったが、イギリスの家庭の夜の食事は、特別な金持でない限り大抵この程度の簡単なもので、また恐ろしくまずいのも定評になっているのを私はやがて知った。ミズ・ハントは料理が大好きだと云っている程あって、塩梅だけは悪くなかった。

お菓子はもっとも上手であったが、しかし菓子には殆んど出さなかった。そのくせ食器棚の上にはオレンジや、林檎や、バナナが、鉢に盛ってある。これらは、食卓の花や、壁の絵と同じく食堂の一種の装飾で、オレンジは皮が剥き、バナナは黒くならなければ容易に人の口には持って行かれないのだ、という約束が呑みこめた頃には、日曜の晩の（その日は昼が正餐になるので）残りものの鶏の冷肉や、生のトマトの丸かじりにもだんだん馴れたが、それにしても、朝はベイコンや卵や、オートミールや、薄塩のおいしい乾物や、何やかやと、どこか国よりも贅沢に食べる人達が、こんな単純な晩食でよ

く我慢されると、時には呆れるのであった。丁度この時分に或る議員は、英国婦人の料理に対する無関心を議会で非難した、彼女らのそうした一般の傾向が、英国の料理をどれほどまずいものにしていくかを云い、同時にこの一事が、観光の旅客をしてイギリスから早く逃げださせる理由の主なるものになっていることを彼は論じたのである。果してそれがまづい料理のせいだ、または高いポンドのせいかはわからないが、腹を痛める点では両方とも同じと云ってよいであろう。どちらにしても、今の戦争さなぎの中ではいかに暢いぶりした英国の議會でも、奥さんたちの料理の下手なことまで問題にして論ずる暇はあるまいと思うと、この一年間における地球のきりぎり舞に今更打ち驚かれるのである。

ミズ・ハントの場合は、この議員の攻撃には当てはまらない。前にほめたように、彼女は中味よく持えるのだから。しかし、ぐわんぐわん銅鑼で召集するほどの料理でないのは、彼女の食卓に列しないものでも厭立を見ればすぐわかることであるが、ミズ・ハントにとって、古風な銅鑼と晩餐とは、トラファルガー広場とネルソン像が、ロンドン見物で切り離されないように到底離れないのであった。それでも家じゅうで揃って食べる時にはまあよいとして、しかし若い人たちはいない時でも、彼女は相変らずぐわんぐわんやった。銅鑼は廊下も壁よりの、丁度私たちのドアのすぐ横に懸っているのだから、わざわざ撥で鳴らしたてるより

も、ちょっとノックして、御飯ですよと一言云えばすむのを、決してそうはしないのである。みんな外で食事をして、彼女と手伝い女と二人きりで食べる晩でも、きつと銅鑼を鳴らすのかも知れない。

晩餐がすむと、奥の客間の、夕方から火をつけることになっている暖炉の前にみんな集った。石炭を焚くのは私たちの部屋とここのだけで、二階から上はガス・ストーヴであったから、この同樂は私たち以外のものには経済的意味もあった。重い帷で仕切られた隅部屋を合せると、三十畳を出るぐらいの大きな部屋で、家具はそれほど贅沢ではないが、なかなか豊富な皿のコレクションがあつて、暖炉の上も、横の壁も、ガラス張りの陳列棚になり、その他の壁面にも多くの皿が飾られてある。支那のものも見えるが、主にイタリアものやオランダものらしい。プロフェッサ・モレイ夫人のこれらのコレクションは、その道のものには評判で、まだ夫人がこの家に住んでいた頃、クウィン・メアリ（今の皇太后）の訪問をさへ受けた。同じ陶器の愛好者として有名なクウィン・メアリは、近くに來られたついでに、モレイ夫人のコレクションを見ることを思いついて急に足を向けたわけである。不意にぞろぞろとお伴がついて入って來たので驚いた、とモレイ夫人から聞いた挿話の受売を、いつかミズ・ハントがしてくれたことがあつた。

ミス・ジュクス——前に云ったパーミンガム生れの美しい金髪の持主で、どこかの工房で